



テーマ『仲間づくり』
田島康賢主任が担当講師。

平成十四年二十八歳で入所、倫理法人会の担当が長かったです。今年度から生涯局ですが、8年前にも2年間、東北、北海道を担当しました。その時、徳江部長より特命が下り「青森県に支部を作れ！」現在では会員はゼロのことでした。

困って、部長に指導を受けた結果、「折れ」拠点は新幹線の当時の終点「八戸市が良い」でした。実践を始め、祈るだけではなく、会う人全てに、青森に知り合いはないか聞いたり、お願いや相談をしました。

そんなある日、青森県八戸市の女性から、倫理に電話がかかりビックリ、支部作りに協力してくださいと、一年後、百五十名の会員で支部ができたのです。「強く祈り願えば叶う」と体験が出て、有頂天になりました。

しかし間もなくして、あの東日本大震災で足元をすくわれました。当日私は、東北新幹線で被災し、車中で唯一電話が繋がったのが、石巻の高橋すみれ会長だけでした。車で避難中ですと、とても明るく話されていますが、なんとその後、津波に流され亡くなられたのです。そしてまた、多くの会員さんが被災され、どん底に突き落とされました。「神も仏も無いものか」と思いました。

また数年前には、エレベーターが突然止まり、1時間半の間、真っ暗闇で一人ぼっちの閉所恐怖症の私。その厳しい状況下で、ある方から内観をする絶好のチャンスと言われ、心を切り替えて座禅を組みました。その結果、内観が深くできたのです。受け止め方が大事なことを学びました。

明朗の日は、太陽(日)と月が合わさったのでなく、暗闇に天窓から差し込む、月あかりの明るさを現した文字だと白川静博士が説明され、**明朗は苦難感から生み出されるもの**だと、様々な経験からも理解できました。

『新に生きる・丸山敏雄の生涯』 生誕百年記念 (30年前に製作された映画です)

天は自ら助くる者を助く・**道徳と幸福が一致する徳福一致の生活法則(純粹倫理)を常識にしたい**・明朗愛和の世の中に!

①丸山敏雄は、明治25年5月5日、丸山家の4男として誕生。学業優秀、品行方正の青年で、父の半三郎に厳しいながら可愛がられ成長しました。16歳で尋常小学校代用教員。小倉師範学校を首席で卒業。21歳で小学校に奉職。27歳の時、長兄・茂治(41歳)が亡くなり、3人の遺児の親代わりに。翌年、広島高等師範学校を卒業するが、父が事故死(75歳)と苦難が続く。28歳で中学校教諭となる。神崎キクと結婚。翌年、長男・竹秋誕生。33歳で長崎女子師範学校首席教諭として栄転。

②長崎女子師範学校の教頭の職を捨てて、37歳で**広島文理科大学に入学**。「**学問の恩師**」西晋一郎博士(国史学・哲学・倫理の研究)と運命的な再会。この出会いがなければ「**純粹倫理**」の開花結実はなかった。

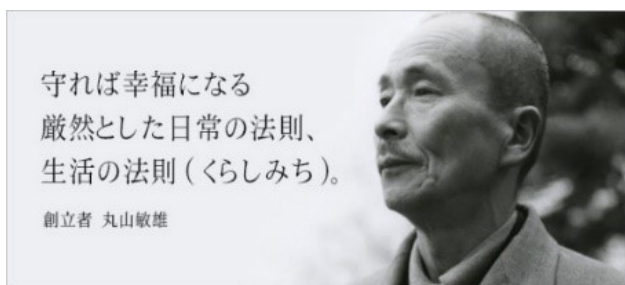
③その3年後、**奇跡的な現象を解明したい**と願い、西晋一郎博士にも相談して、広島大学卒業後に内定していた師範学校の校長職を辞して、「**真理の恩師**」御木徳一氏の、「**ひとのみち教団**」の教師を志願。学問では掘めなかった真理への道に、期待は燃え盛った。一家4人の生活は清貧を極めたが、修業はぐんぐん進み、**気づき即行、全一統体の原理**を知り、短歌の魅力にも目覚めた。入団2年目で準教祖に任命されるほどの、捨て身の修行だった。

④しかし、丸山敏雄先生は、昭和12年44歳の時、思想・言論統制の国家権力のもと、不敬罪で検挙と拷問。独房に9カ月間で壁に並んで浮かぶ**両親に毎日涙し、親不孝を心から詫言(涙の交流)**。「人間は父母の愛に触れないと何もわからない」と悟る。

⑤学生時代(広島)、教師時代(長崎)で深く関わった地を**原爆で失い、無条件降伏。日本が本当に無くなってしまおう!**

⑥敗戦後日本は、人々の心が荒み、道義は乱れ宗教心が薄らいでしまった。このままでは、地球上に存在する意義すらなくなってしまおう。天は自ら助けるものでなくては助けません。「**自分のすべてを投げうって、敗戦の焼け跡から萌え出る新しい芽を真っすぐに導こう、人間の真の幸福を教えよう**」と、昭和20年**敗戦直後に決心**する。**道徳と幸福が一致する(徳福一致)生活法則を、日本の人々に何としても知らせたい!**

⑦昭和20年9月3日「夫婦道」という論文を書き始める。「この平和と世界文化建設の退任に入る」(創立記念日)昭和22年10月11日「**文化と家庭**」創刊・20円。昭和24年3月「新世」と改題。8月、純粹倫理のエッセンスともいべき17ヶ条を抽出し、倫理運動の基本テキストとなる「**万人幸福の契**」完成。著者自ら定価百円払って購入。昭和26年2月20日キク夫人と伊勢神宮を参拝。「身代わり」の祈誓が捧げられた。



守れば幸福になる
厳然とした日常の法則、
生活の法則(くらしみち)。
創作者 丸山敏雄

この映画を観て、丸山敏雄先生は、**最高の教育者だ!**と感動しました。

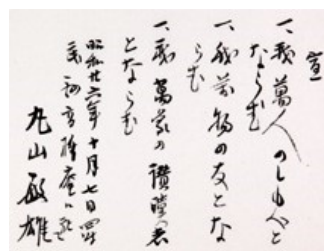
⑨この映画は、丸山敏雄先生が臨終まじかで「**人生は演劇を実践できたのだろうか?**」自問するところから始まった。

昭和26年12月14日午後12時42分
武蔵境・高杉庵において永眠。

最後の言葉
急ぐな 先のことを心配するな
自然にまかせて処置をとれ
これでよい 喜べ

この5つの語句が、敏雄の生涯をかけた戦いのすべてを語っている。後に残される人達へ贈る、言葉ばかりである。

⑧昭和26年10月14日、千代田区の共立講堂で「人類の朝光」と題して最後の講演を行う。



「宣」
一、我 萬人のしもべとならむ
一、我 萬物の友とならむ
一、我 萬象の讃嘆者とならむ

これが書かれたのは、昭和26年10月7日の早朝4時。死の2ヶ月前でした。

源流吟より(作詞・丸山敏雄)
我が願い たぐいも無けれ
しみじみと 人類の幸
思うなりけり

『新世会(倫理の前身体)趣意書』

我国は今、大切な時に当たっております。というのは、道義は乱れ、宗教心は薄らぎ、目を覆わしめることも少なくありません。

このままに捨てておいたら、日本が地上に存在する意義も無くなるでしょう。

自ら助けるものでなければ、天は助けません。本会は、**こうして止むに止まれぬ念願から発足致しました**。(全文は別紙を参照)

昭和二十二年九月に、丸山敏雄先生が書かれた文章です。七十一年経った今、状況は益々悪化し、深刻ではないでしょうか。

『宗教と純粹倫理の相違と接点』

宗教は縦の法則(対象が神仏・絶対的存在)ですが、倫理は横の法則(対象が人物、自然で、心の状態を大切にしています)。

直接ストリートに神仏に参入する宗教に対して、純粹倫理は生命の本源である親をかならず通って神仏にまで恩の遡源を進めます。『万人幸福の契』13条で「親をおして己の生命の根元(もと)にさかのぼれば、そこに神仏にかえる。敬神崇祖、即宗教に入ることが、真の人となるゆえんは、ここにある」と、丸山敏雄先生は言われました。

「**良いことは人にすすめるべきである**」人のためにという真心を込めて、つまりぬ我欲を離れて、良いことをすすめるべき、いつしかその良いことが信念となって自分に返ってくる。

分かっているからすすめるのではなく、すすめているうちに分かってくるのです。相手を責めず、見下げず、こちらから改めて行くのだから、これほど謙虚な道はない。

編集後記 宿泊研修に参加して、丸山敏雄先生の志の高さに感動し、一人でも多くの方々に伝えていきたいと思ひ編集しました。先生のお願が叶いますこと心から祈念し、倫理運動を応援して下さい。仲間づくりの実践を致します。

文責 岩見正樹